

創立者佐々木東洋の生涯

順天堂大学医学部医史学教室客員教授 酒井シヅ

杏雲堂の創立者佐々木東洋は、篤学精励の人で、卓越した学識と技倆を備えて患者から高い信望と尊敬を博した人といわれる。

東洋は天保10年(1839)6月22日に江戸本所四ッ目に外科兼薬屋を開業していた佐々木震澤の長男として生まれた。幼名は伝次郎、諱は師興、通称を東洋といった。父震澤から医業の手ほどきを受けた東洋は、18歳の時、西洋医を志して下総佐倉の順天堂に行き、佐藤泰然に入門、やがて泰然の後継者佐藤舜海(尚中)に師事、舜海が長崎に行くと聞くと、それに従って長崎に行き、オランダ海軍軍医ボンペに師事した。東洋と尚中、ひいては順天堂と深いつながりがこの頃にできあがっていたのである。文久元年(1863)に江戸に戻った東洋は、実父をたすけて亀沢町で開業。長崎帰りの若先生の人気は高かった。

明治になると、新政府から大学東校(東京大学医学部の前身)に出仕を求められた。大学東校では尚中が大学大博士、すなわち責任者の地位にあった。その下で大学得業生(助手)、少助教とすすみ、明治4年、ドイツ人教師が来日してからは、中助教となって助手を務めたが、このとき屍体で打聴診の腕を大いに磨き、打聴診の名手と言われるようになったのである。その成果は明治5年、著書『診法要略』として出版され、東洋の名声を高めたのであった。

しかし、明治5年、尚中がドイツ人教師等と対立して大学を辞めて国内最初の私立病院、博愛舎を開業したとき、東洋等もこれに従った。

翌6年、尚中が順天堂を開いて博愛舎が解散になると、東洋は亀沢町で再び開業したが、たちまち手狭になったために蛸殻町へ移転する。だが、そこでの開業も長く続けられなかった。翌7年、天皇の意向で貧困者のために東京府病院が開設されることに決まったとき、東洋に副院長就任が要請されたからである。そして翌8年に、東京医学校に3年の通学コースが設けられることになると、東洋に病院長就任の白羽の矢が立った。この短期通学コースの設置は尚中らが望んでいたが、ドイツ人教師ミュルレルに阻まれていた。それでドイツ人教師が満期退任すると、待っていたかのように短期コースが開設されたのである。尚中の厚い信頼を受けていた東洋が病院長になったことで、それまで閑散としていた病院に患者が殺到した。また、短期コースに全国から医学生が集まった。東洋には臨床医として手腕がいかに高かったかを語るエピソードがある。尚中は明治8年にお茶の水に順天堂が開院した直後、咯血して倒れ、命も危ぶまれたときに、尚中が選んだ主治医は東洋であった。もっとも信頼していた東洋に自分の治療を任せたのである。



翌9年、ドイツから帰朝した医学士池田謙斎が東京医学校校長になると、職を辞して再び開業した。このころ自宅は蛸殻町から駿河台に移っていた。これで落ち着くかと思っていたところ、翌10年西南戦争が勃発すると、開業を中断して軍医として出征した。西南戦争が収まると、直ちに家業に戻ったが、このように目まぐるしく職が変わったのは、明治初年、医学制度がつぎつぎと変わっていくのに、その要となる西洋医学者が少なかったからである。自己より公を優先する東洋は得難い存在であったのである。

開業生活に戻った東洋は、この年、日々研鑽を重ねてきた内科学をまとめて『内科提綱』と題して出版している。同書は一般の開業医から実践に役立つときわめて好評であった。

しかし、明治11年、東洋は再び政府から出仕を求められた。新設された脚気病院に勤務することを命じられた。この頃、東京では脚気が大流行していた。明治天皇自らも脚気に罹り、脚気に強い関心を抱かれて、脚気の治療法の研究を求められた。天皇は脚気病院を設けて、西洋医学と東洋医学の治療を比較検討することを求められたのであった。そのとき佐々木東洋が西洋医学の治療責任者になった。

明治16年までの予定で始まった脚気病院であったが、明治15年6月末で突然中断されることになった。そのとき佐々木東洋は自らの病院を駿河台西紅梅町三番地に開院して、脚気患者の治療を継続することを決意した。その開院の日を6月1日に定めて、新聞に広告した。杏雲堂病院開院の日である。

杏雲堂病院はたちまち門前に市を成したが、その後、政吉、隆興という優れた後継者を得て、杏雲堂は益々盛んになって行った。杏雲堂に一貫していることは、東洋の目指した科学的医学が継承され、発展したことである。

その後、東洋はしばらく対外的にも活躍する。明治19年に内務省中央衛生委員となり、明治23年には医師会の前身である東京医会会長になるが、その仕事と診療を除くと、ほとんどの時間がドイツ語の医学書を読むことに費やされていたという。

明治29年、東洋は政吉に後を譲って引退したが、政吉も、かれの養嫡子の隆興もドイツ留学を終えて、帝国大学教授を経て、杏雲堂院長になっている。東洋は杏雲堂が内科病院として他の追従を許さない病院として発展しているのを見届けて、大正7年10月9日に功なり遂げて大往生した。享年は80であった。

